



7月号

ひだまり

今月のエッセー

散歩で頭の中も散歩した

私が住んでいる家の裏は小高い丘になっていて、坂道に沿って一軒家や団地が軒を連ねています。先頃の休日、久しぶりにこの丘を散歩しました。

数百メートルの坂を上りきると急に平らになって住宅の密度は低くなり、代わりに畑が存在を増します。

丘の上には小学校があり、月曜日の昼時だったので、中で子供たちがはしゃいでいました。

その前を通り過ぎると畑があり、脇には名前も知らない草が生えていて、アブラムシが沢山くっついていました。それをテントウムシが食べていました。ヨー

仏教のことば

いちごいちえ 一期一会

この言葉は、茶道の祖として知られている千利休の弟子、山上宗二の秘伝書『山上宗二記』に「一期に一度の会」と記されています。また、優れた茶人でもあり、江戸幕府の老、井伊直弼の『茶湯一会集』には「今日の会にふたたびかえらざる事を思えば実に我一期一度の会なり。是を一期一会という」と出ています。

日々、様々なものが移り変わっています。今こうしている(この文章を読んでいる)間にも、少しずつ物事は変化を続けています。ところが、残念ながら私たちは大抵そのことを忘れていきます。



体験していることでも、大きく変動した時は如実に感じ取ることが出来ますが、些細なことであれば、ほとんど気がつくことはありません。例えば、同じ暑さでも昨日・今日の一度の差、変化はほとんど気にしていないわけです。一気に気温が下がったりして初めてそのことを意識するのではないのでしょうか。

しかし、実際にはその変化し続けている瞬間が積み重なって、私たちの一生(一期)が構成されています。そのことに気がつき、丁寧に心を向けていくこと。それを仏教ではとても大切にしています。 ◆伊藤正法

編集後記

七月も後半に入り、梅雨も明けたら夏真っ盛りの八月です。皆さんはこの季節をどのように感じているでしょうか。私のこの季節のイメージはズバリ高校野球。甲子園の開幕を今今かと待ちわびてソワソワし始めます。選手たちは負けたら最後。その大舞台で一瞬一瞬に全力を注ぎ、白球を追いかけます。毎年その姿に勇気づけられ、感動を与えてもらいます。

甲子園の熱さに比例するかのようには、ここ近年夏の暑さも留まるところを知りません。どうかお身体には気をつけてお過ごしください。そして、また九月にお会いできることを楽しみにしています。 ◆深澤亮道

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

ロッパではテントウムシは幸せを運ぶ虫とされているそうですが、アブラムシにとってはむしろ悪魔のような存在だろう、そんなことを考えつつ視線を横に遣るとカヤが目に入りました。カヤを見ると幼い頃に手を切り、いつまでもシクシク痛んだのを思い出して、切ってもいないのに痛いような気がしてきました。また歩き出すと別の畑が現れ、そこにはナスやトマトが植わっていました。畝毎に「四年」「五年」「六年」とあったので、たぶんさっきの小学校の畑でしょう。自分の小学生時代に準えて、収穫したら家庭科の時間か、もしくは特別に給食にして食べるのだろう、などと勝手な想像をしてまた散歩を続けました。やがてまた畑が現れ、この畑の畝の向こうには急行電車の停まる隣駅と、その前にあるデパートやビルが頭を覗かせています。普段、私が歩いているその街の都会的な賑やかさは、ここから眺めると実際の距離以上に遠くのことのようでした。けれども、不思議とここの内は駅前よりも多彩で、心地良く賑やかなのでした。 ◆田代浩潤

法のお話



三年度
田中仁秀

夢幻の如く

人間五十年 下天のうちを比ぶれば
夢幻の如くなり

時は戦国時代。京都の本能寺で明智光秀によって命を落とす遙か前に戦国武将織田信長が今川義元との桶狭間の戦いを前にして、出陣する際に詠んだ一節です。

これは元々、鎌倉時代に成立したとされる『平家物語』の中で、熊谷直実がこの世の儚さを感じて出家をした際、詠んだ一節とされております。

直実は、戦いの際に敵陣にいた自分の息子と同年代の敦盛の首をはねた自責の念から、この世の儚さを感じて出家をした武士でした。

これが後に、幸若舞（主に室町時代に流行した舞曲）『敦盛』として戦国武将の間で人気を得ることになります。

当時の平均寿命は五十歳。この一節は「人間の一生は五十年、それは夢のように儚いものだ」ということを意味しています。

ここでの「夢」は、睡眠の際に見るものや将来への願望である、「DREAM」を指すのではなく、この生きている世界を夢に譬え、「この世の全ての存在は永遠に続くものなどなく、常に移り変わっていく」ということを表しています。まさに「夢」とは、仏教でいうところの「無常観」につながっているのです。

では、何故戦国武将はこの一節を好んでいたのでしょうか。

私が推測するに、迫りくる戦を前にして、「これが最期の日になるやもしれぬ。」といった恐怖や不安と対峙し、そして覚悟を決め、悔いが無いように一日を過ごそうと心を定めるために、この一節を詠んでいたのではないかと、思うのです。

「一日一日を悔いが無いように過ごす」今こうしている瞬間も時は流れ、物事は変化し続けています。私たちの身体もそうです。

私は、今年で三十三歳になります。昔を振り返ってみると、十代、二十代の頃は勢いに任せて、物事を細部まで味わうことが余りなかったように感じます。

しかし、歳を重ねることによってスピードが落ちた分、一つ一つのことにしっかりと目がいく様になり、より丁寧に、より大切に物事を味わって取り組めるようになりました。趣味一つとってみても、あれもこれもと手を出すのではなく、以前からずっと続いている趣味、例えば、読書や音楽鑑賞などを日々の日課の如く愉しみ、時には夢中になって、その時間を、その瞬間を味わっています。

十代、二十代にはなかった感覚です。何かに夢中になることは、時とともに変化している自分自身と向き合っている時間なのかもしれません。

四十代の私、五十代の私。その時々「私」を感じて、今を生きる・・・夢のように儚い一生だからこそ、夢になれる時間を大切に、一日一日を歩んでいきたいですね。

仏教の行事

盂蘭盆会



盂蘭盆会とは、お盆の正式な呼び方です。現在のお盆の行事は「仏説盂蘭盆経」というお経に由来しています。そこには、お釈迦様の弟子の目連尊者が、苦しみの世界にいる亡き母を救うというお話がでてきます。

実はこのお経はお釈迦様の言葉ではなく、後世に作られたものとも言われていました。それでも、盂蘭盆会という仏教行事は今日まで親しまれています。それは、亡き人を想う気持ちが国や時代を越えても変わらないものだからでしょう。

この日は、日常の忙しさに追いやられている私達が、今一度心を落ち着けて亡き人に想いを馳せる大切な時間でもあるのです。

最近の研究によって、「仏説盂蘭盆経」は後世の作ではなくお釈迦様の時代に作られたことが分かってきました。夏のお盆のお参りが、少しだけ楽しみになりました。

◆本田真大



ひだまり書房



美坊主図鑑

～お寺に行こう、お坊さんを愛でよう～
著 日本美坊主愛好会

ご存知でしょうか。実は今、巷ではお坊さんがちょっとしたブームになっているそうです。映画になったり、ドラマになったり、テレビ番組に出たり・・・そしてこの本もその中の一つ。タイトル通りイケメンのお坊さんを紹介した本です。

時代が変わればお坊さんの在り方も変化するもの。この本に出てくるお坊さんはバイクに乗っていたり、音楽活動をしていたり、お笑い芸人だったり。お坊さんと言っても様々で、とてもじゃないけど一括りにはできません。

貯まるのは貯金ではなく、仕事の山とストレス。流すのはさわやかな汗ではなく、悔し涙。そんな不安と問題を抱えた現代社会の中、私たちお坊さんはどう関わっているか。この本を開けば新たなお坊さんの一面に出会えるような気がします。

注) すみません。所員は誰も載っていません。

◆深澤亮道